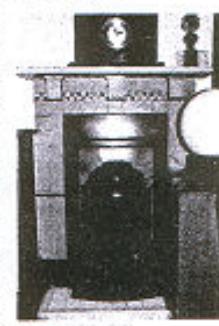


そこに「中流住宅」の典型を見た

今、桜ヶ丘を歩いて――

西山卯三



客間兼書斎の暖炉

ていなかつたこと、今一つは私が幼少のころしばらくのあたりで通じたことがあり、その記憶を確かめたいということだった。

住宅地見学のあと、案内の西村さんと、桜井駅に接した旧市街、桜井一丁目のあたりをぐるぐる歩いた。

阪急桜井駅をおりると駅前から線路に直角に真直ぐ北西へ道が走っている。線路に平行の大きい道路をこえると、四米ほどの狭い道に、両側二階建の店がならぶ繁華街である。昔風で道巾は狭いが、ちゃんと幕巻目の区画割りの町がつづく。その中の一つは巾が少し広く、桜並木がある。並木といつてもいわゆる街路樹のように真直ぐに立っているのではなく、根元から幹が傾き自由に枝がはり出し、車など邪魔になりやう。独特の家並だ。桜井の桜になぞらえたのかもしれない。このあたり一帯が阪急電鉄の沿線開発の第一号、「桜井住宅地」であるとすぐわかる。真直ぐな、しかし狭い道は大正期の住宅地の風情を偲ばせる。

ここを通りぬけると道巾は少し大きくなり、先上りになっている。道を斜めに横切る箕面川の両岸の堤が高くなつておらず、それを渡るために橋は桜ヶ丘の住宅街をここにもつてきた地元の有力地主の名をもつて田村橋、橋を渡つてこの田村通りを下るとすぐ斜め右に折れ、すつと向こうの高台につづく一本道が見わたせる。「桜ヶ丘住宅」はこの坂を登り切った丘の上にある。右側にぐるっと半円を描いた枝道がでており、これが大正一一年（一九一二年）日本建築学会住宅改造博の会場であったことがすぐわかる。

一軒だけ、いま取り壊されて建て替えた工事をしている。基礎がすでに埋戻し中、そこに入ってみると、丘の下、南の方は遙か箕面川そいの低地に瓦屋根の波が見え、向こうの方に千里丘陵が望まれる。桜ヶ丘は阪急住宅地を下に見る景勝の地にあつた。

私がこの桜ヶ丘住宅を今度是非見たいと思ったのは二つの理由がある。一つは拙著『日本とそのすまい』で大正時代のアルジョア住宅の典型としてこれをとりあげたが、実地には見

私がちょうど小学校二年生の頃だったか、大正八年（一九一九）は全国的にスペイン風邪といわれるインフルエンザが流行した。私の住んでいた大阪の西九条でもたしか休校になつた気がする。空氣の悪い工場街だったので、私と四年生の兄とが一時叔父の家にあけられた。叔父は北浜で株屋をやっており、その家が桜井住宅地にあつた。駅から少し線路ぞいに裏面の方に歩き、左に入った右側で、駅から五分とかからぬと思った。生垣が開かれて、閑静な平屋建ての家、どんな間取りで、どこに寝たかの記憶は全くないが、書斎らしいつき出た四帖半くらいの椅子をおいた部屋の壁に、赤・青の線を引いたグラフがいっぱい貼つてあった。株の上り下りを書いたものだったらしい。叔父は金縫の眼鏡をかけ、叔母は細眉で、二人暮しだった。

何もすることがなかつたので少年は悪戯を考え出した。トンビが忘れていた飛び蛙を電車のレールの上におくと、ペシャンコになる。近所の子供と二人でかけた。ちょうど駅から電車が出るのが見える。段々スピードを出す。ものかげに隠れて見ていて、時に石も置いた。三五番という電車の運転手は、いつも悪戯をする子供たちをにらんで、「コラッ」と大声でどなつて走り去つた。電車の運転台は吹き放しだったことを、この記憶から回想する。

時おり遠くへ出かけた。友達は生垣の木の実をしゃぶつたが私はできなかつた。その家がどこにあつたか。そのあたりを歩きまわつたが見当がつかない。当時は全く野原だったところに家がぎっしり建てつまり、何代目かの建て替えの二階建が狭い道においかぶさり、つらなつてゐる。桜ヶ丘住宅ができたのは、それから三、四年あとのことである。

第一次世界戦争は大正七年（一九一八）に終つたが、日本は参戦したといふもののはほとんど戦争国外にあつた。欧米が戦争に没頭している背後で一挙に工業を発展させ、世界市場に進出する好況にめぐまれた。戦後部分的な恐慌はあつたが、資本主義は大きく成長し、大正デモクラシーといわれる個人主義・自由主義の風潮が高まつた。生活の面では、明治以来の古い封建的な様式をあらためる家庭生活改善の運動がおこり、洋風生活を模倣し取り入れようとする気運が強まつた。佐野利器らを中心に「生活改善同盟会」が活動をし、

大正一〇年には生活様式をタタミの上に座ることから椅子式にあらためる、家の体面を考えて接客構えを重視したことから家族本位にする、構造設備は虚飾をさけ、衛生や災害防止に重きをおく——などの方針を打ち出している。従来の開放的な縁側・両戸式から両開きガラス窓、出入口もドアにといった洋風化が一段とつよく進んだ。

これは主として、東京の動きであったが、日本の経済・文化の今一つの中心である関西では、片岡安などを先頭に日本建築協会が都市計画法や市街地建築物法制定の運動をすると同時に、住宅についても改良(改進)の運動をはじめ、大正八年(一九一九)にはコンペをやっている。さらに一〇年一月に「住宅改造博覧会」を行なう計画で改良住宅のコンペを行なった。当選した設計案をみると、いずれも洋風が基調で、居間・食堂・書斎・応接室などはイス式、女中室・老人室・寝室などに便をのこしているものが多くみられた。この傾向は、明治末期から住宅の洋風化の動きとして広く行なわれていた洋風応接室などを和風の住宅にくつづける「和洋折衷様式」とは全く異り、住宅全体を洋風基調にしてしまうとするもので、大正時代の清新な急吹を感じさせるものであった。

こうした考え方が実際の形をとつてあらわれたのがひと足早く大正一一(一九二二)年三月、上野で開かれた平和記念東京博の文化村である。これにつづいて一年九月に大阪桜ヶ丘住宅改造博が開かれた。

上野の文化村は、その後「文化住宅」(これは戦後関西で通用している木質アパートとは全くちがう)という名を流行させたモデルで、赤瓦に白壁のこぢんまりとした「文化住宅」は当時のサラリーマンの憧れの的であった。出品作品にはやはり洋風イス式の居間・応接室・食堂などを取り入れた間取りが多かった。平和博文化村は会期がすむと売れたものは移築、あとは取りこわされたが、桜ヶ丘の改造住宅は、その後多くの住宅展示会の先がけで、建設業者が設計施工などで建てたものをそのまま土地付きで即売するものだった。そのため敷地の決定が少し手間とったが、博覧会にありながら冒険的な新奇さでなく、予想される顧客である当時のブルジョアの嗜好をよく考えた実際的な設計が苦心された。それが、居間中心型といわれるプランも若干あるけれど、ほとんどは部屋の通り抜けをさせてホールや中廊下をうまくあしらい、各部屋はどのよつとも使える間取りになっている。

居間中心の住宅——これをちぢめてゆくと戦後の「公私室型」になるが——をうまく住みこなすためには、家族生活の完全な民主化が必要であるのに、当時の上流ブルジョア家庭では、まだ団らんを中心とする生活が熟していなかつたからである。このことが現在残っているいくつかの住宅をみて、居間・食堂を比較的大きくとつているものの、

間取りのタイプは中廊下型かホール中心型、またはその結合型が圧倒的である。

大都市化の弊害をさける英國の「田園都市」は早くからわが国に紹介されていたが、わが国では職住近接の田園都市はほとんど建設されていない。「田園都市」と名づけていてもすべてベッドタウンで、郊外電鉄の沿線開発も、この桜ヶ丘住宅もその例である。桜ヶ丘住宅は阪急電鉄の沿線郊外住宅地開発と直接関係はないが、都市発展上はその系列に属するものとみてよい。

当時ようやく大阪の都心部の過密化が進行しはじめ、船場・島の内あたりの商家や新しい会社・銀行などの経営者・高級勤め人が住宅を市内に求めるることは困難になっていた。これに対し郊外電鉄が乗客誘致のため沿線に「田園住宅」を開発しはじめた。大阪ではこの都市部からの一般サラリーマンの郊外脱出は昭和九年の風水害を転機にさかんとなるが、それまでは遠隔郊外からの通勤は経済的にも時間的にも余裕のある上層でなければ無理であった。だからこうした郊外住宅は、はじめはむろん都心に住むブルジョアたちの別荘・別宅という形で発展した。より下層の一般サラリーマンは大阪では旧市周辺部の区画整理された地域に居を求めた。かなり高給者でも長屋住宅に住むことはめずらしくなく、またその人たちの住むに適する中大規模の長屋がどんどん建てられていた。

桜ヶ丘住宅は、日本建築協会の強力な援助の下に、思い切って郊外に居を移した中上流ブルジョア・サラリーマンの住宅である。したがって、ホール型・中廊下型の穩健な間取りであるが、上下水道の完備、風呂は和風だが便所は水洗式、こまごまとした設備や器具も今のようにメーカー部品をアレンジしたものではなくて手づくりの設計、構造は木造であつても入念な施工で、六五年の歳月をへた今でも、手入れが加わっているもののピクともせず健やかに現存している。

この近辺には道路にはみ出した生垣がその古さをしめす広大な屋敷の住宅も所々にある。それらにくらべるとこの住宅はハイクラスの「上流」ではなく、明らかに中流住宅である。しかし現在の日本の九割中流の「中流」ではない。あたりを見まわしても皆同じくらい、すこやや「ウサギ小屋」でも周囲がそつだから「中流」といった現代のセンスからいえば、これは明らかに「上流住宅」である。そのいくつかは売却され、一戸の敷地に数戸のテラスハウスが建てられたりしているが、その各々が明らかに現在の標準からいえば中流住宅で、もとの住宅がむしろ大邸宅であったことがわかる。

私は、桜ヶ丘にのこっている六五年前の住宅群の中に、大正期の、洋風を大胆にとり入れた清新な本当の「中流住宅」の典型を見る思いであった。

箕面・桜ヶ丘の住宅改造博覧会

その歴史的意味と意義――

安田 孝

箕面・桜ヶ丘の住宅改造博覧会

大正二年一〇月八日、大阪北郊箕面の「桜ヶ丘」において住宅改造博覧会の開場式を行なわれた。六日以来の一日づきの雨がみごとに晴れあがった秋空のもと、会長片岡安による開催の趣旨説明につづき總裁として祝辞を述べたのは子爵後藤新平であった。さらに池松大阪府知事のあとに大阪市助役間一の演説があったらしい。この静々なるメンバーに、箕面有馬電鉄駅としての村山龍平（朝日新聞創業者）、本山彦一（当時の毎日新聞社長）を加えれば、この博覧会の社会的背景と歴史的意義はおのずと明らかになるであろう。

一方、東京では同じ年の三月から七月まで上野公園での平和記念東京博覧会が開かれ、分離派建築会の堀口捨己や滝沢真司らが建てた異様なバウハウス群と、「文化住宅」が話題になつたところだった。

明治・大正期の都市と住まい

一般に大正デモクラシーと呼ばれる時期区分については議論のあるところのようだが、ここでは日露戦後恐慌（一九〇七年）の明治末から満州事変勃発（一九三一年）までの昭和期を含めておこう。このころには、ふたたび近代日本の転換期が始まつていたらしい。明治維新以来、国家目標となる

れていた富国強兵、殖産興業のスローガンがゆらぎ、生活と文化、社会へと关心が移りつつあったと言われる。

明治期にも、生活基盤建設としての道路、鉄道、上下水道などの整備も進められてはいたが、都市そのものは前近代的、非衛生的居住環境でおおわれていた。市街地の形態も江戸時代からの形態を受けついで、道路幅員が狭い、樓梯が弱体（これは戦略的配慮による）、港湾・運河の未整備などの基本的欠陥を有していたのである。ところが、東京でも大阪でも明治一〇年頃以降は順調に人口が増加し始めた。その頃の一〇年間には両市とも、約五〇パーセントの人口増加があつたと考えられている。それで東京では空地空家となつた広大な武家地の再利用が、住宅問題の顕在化を抑えたと言われる。しかし大阪は町人の町であった。それほどの空地が残されていなかつたため、松平忠明によって町割整備された地域やその後に開発された新地の外郭へ無秩序なスプロールが生じた。それは、既前に数多く

現れた富國強兵、殖産興業のスローガンがゆらぎ、生活と文化、社会へと关心が移りつつあったと言われる。

明治期にも、生活基盤建設としての道路、鉄道、上下水道などの整備も進められてはいたが、都市そのものは前近代的、非衛生的居住環境でおおわれていた。市街地の形態も江戸時代からの形態を受けついで、道路幅員が狭い、樓梯が弱体（これは戦略的配慮による）、港湾・運河の未整備などの基本的欠陥を有していたのである。ところが、東京でも大阪でも明治一〇年頃以降は順調に人口が増加し始めた。その頃の一〇年間には両市とも、約五〇パーセントの人口増加があつたと考えられている。それで東京では空地空家となつた広大な武家地の再利用が、住宅問題の顕在化を抑えたと言われる。しかし大阪は町人の町であった。それほどの空地が残されていなかつたため、松平忠明によって町割整備された地域やその後に開発された新地の外郭へ無秩序なスプロールが生じた。それは、既前に数多く

でのコレラ、腸チフスなどの大流行と、それに伴う大量の死者発生の要因のひとつともなった。大阪ではその後も伝染病の発生はつづき、腸チフスや赤痢、ジフテリアなどは大正期に増加したとも考えられる。

この間も都市人口は増大しつづけ、中流階級と称される都市サラリーマンの比率も高まつていくのだが、それ以上に大量に出現したのが工場労働者であつた。そして当時、こうした新しい都市住民を対象とした住宅対策は全くと言っていいほど考えられていなかつた。

このような都市下層階級をも含めた住宅事情（あるいは生活事情と言つべきか）は、明治三〇年代から少しずつ注目されるようになるが、都市政策、住宅政策として本格的に検討されるのは大正期の中頃になつてからであり、後藤新平や片岡安、間一はその中心的役割を担つたのである。

文化住宅と郊外の発見

明治維新以来、建築と都市における近代化の追求は、すなわち洋風化の追求にはかならなかった。それは初期には煉瓦街や上流階級の洋併存住宅などとして実現された。しかし、一般庶民の住宅を対象とした在来住宅批判としての「家屋改良法」が出現するのは、ようやく明治三〇年頃になつてからだと言われる。これは、建築学会機



大阪機械本部出品住宅



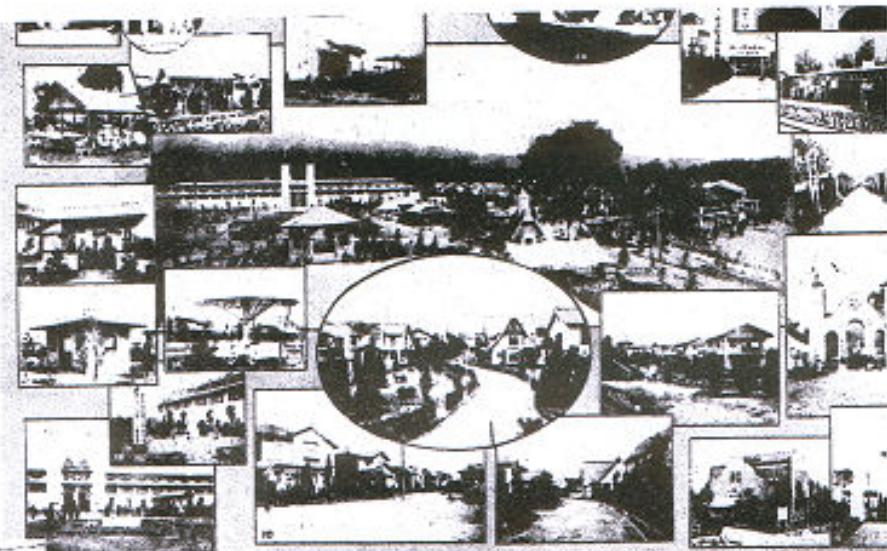
理化研究所出品住宅



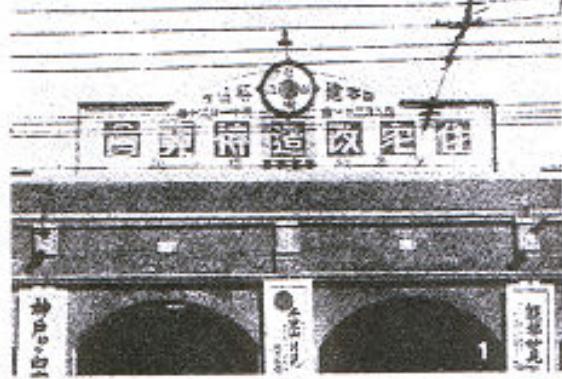
横河工藝所出品住宅

関誌の創刊号でも既に論じられていたらしく、建築家による本格的な在来住宅批判は明治三〇年代後半に入つてからである。学会機関誌『建築雑誌』で賀賀重列、矢橋賢吉、源本靖などの著名人がこの在来住宅批判を展開している（明治三六年）。相前後して中流住宅としての和洋折衷住宅の提案もされている。

明治三〇年代中頃は日露戦争の直前であり、その頃、大阪で初めて第五回国勧業博覧会が天王寺村で開かれた。その後、明治四〇年代に入つてから大阪では本格的に市街地を中心とした大阪市南部の地域においてのことだという。この頃から阪堺鉄道



住宅改造博覽会大類の一組



大阪府天王寺駅前電車場



片岡安

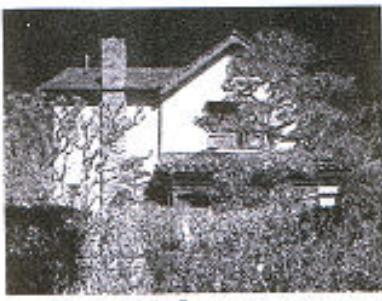
片岡安（一八七六—一九四六）
大正・昭和時代の建築家・財界人。明治九年、金沢生まれ。東京帝大建築学科卒業後、明治三五年吉岡彌蔵「國工社・萬相」の弟子となる。日清、三十陸銀行の社長を経て、三八年長野市国建務事務所（大藏）を設立。大正六年開國建務会会員となり、同一年は國建務会議長として活動。六七年より長野市計画の監修、法制化に従事。九年工学博士となる。一一年には大阪工業会理事長、昭和八年大阪市計画会議所副会長、同十五年には同会員となり財界活動を行なう。

片岡安（一八七六—一九四六）

（後の南洋鉄道）の天下茶屋駅を拠点として一舉に宅地化が進行したらしいが、それは前記の天王寺村での博覧会跡地の宅地化を契機とし、明治一七年開通の當時の阪堺鉄道の存在を前提とするであろう。こうした背景のもとで、明治四一年五月の大坂毎日新聞にはすでに「郊外生活」という記事が現われている。同じく三〇年代後半には内務省の官僚が英國を訪問し、明治四〇年の末に内務省地方局有志による「田園都市」も公表されていたが、現実の市街化は、英風流の田園都市構想に基づくものではなく、むしろ郊外生活あるいは郊外住宅地の発見として進行しつつあったと言うべきである。



大阪府天王寺駅前電車場



日本建築学会出品住宅第6号



鐵道出品住宅

一方、明治七年に開通した国鉄大阪相戸
町の住宅地化も、本格化するのは明治三八

年（一九〇五）の阪神電車の開通以降のことである。当時の住吉村（現在の神戸市東灘区）の観音林を阿部元太郎が開発し、四〇年以降には阿部一族や住友家をはじめとする関西財界の知名人が居住し、急速に宅地化が進行した。こうしてみると大阪市南部と阪神間の住宅地化はほとんど同時期であり、明治四一年三月の大坂朝日新聞にもその両方が紹介されているという。

さで、すでに述べたように、市内の居住環境はさわめて悪化していた。そこで阪電では沿線の住宅地開発を推進するため、明治四一年一月一日付で「市外居住のすすめ」と題する小冊子を出版している。当時の専務取締役の委嘱によつて、庶務課長高田兼吉が編集したこの小冊子は、佐多愛吉をはじめとする大阪市在住の医師の講演をもとに作られたらしく、田園附市外生活、市外居住、田園生活などの言葉が用いられている。また、高田自身のあとがきでも庭木での田園生活に関する書籍にふれているので、田園都市構想についての情報はもうついたまつた。

さらに少しあとになると、大正二年一月から阪神電鉄運輸課長の太宰政夫が担当して月刊雑誌『郊外生活』を一部一二銭で発行している。これは二年足らずで刊行中止になつたが、内容は郊外生活をいかに趣味興味で楽しむかをテーマにしたものであり、長谷川知是闇や薄田注連などのエッセイも掲載されている。しかし多くは園芸記事を中心としたものであり、郊外生活の宣伝によるとまことに阪神電車からの連絡記事の閑知にとどまっていた。また、明治四一年頃に天下茶屋付近でも同じく『郊外生活』という新聞のようなものが定期的に発行されていたらしくい。

こうして明治四〇年代初期には中流住宅としての文化住宅と郊外生活に対する認知度が少しだいに定着していくのだが、市内の居住環境が過酷であったぶんだけ、関東にこ



あのりか屋出品他在(平和記念東京博覧会)——「被服雜誌」大正11年No.430より



明治31年の岡本寅平監修——「櫻痴詩話」明治31年No.1-12止



会場内の課題

郊外分譲住宅地の出現

阪神電鉄は明治四二年以降、西宮、鳴尾、御影、東明などで貢家経営を始めた。しかし、郊外分譲地の先駆者としての名譽は、箕面有馬電鉄（後の阪急電鉄）による也田選町に譲ることになる。

大阪市内南部や阪神間にくらべて、やや出遅れた感のある箕面有馬電鉄にとつては、より低所得の中流階級の需要をいかにひき出すかが重大事であつた。だが、箕面有馬電鉄の実質的創業者小林一三の苦労談にもあるように、郊外生活の眞伝は盛んになつていても、現実に住宅・宅地需要を顕在化させるのは容易ではなかつたらしい。それはひとつに、いわゆる中流サラリーマンにとって、戸建住宅を購入することが決して楽ではなかつたことによる。また、職場との距離に対する抵抗感もあつただろ。うなによりも中流サラリーマンの絶対数がまだ少なかつたのである。

この駅町住宅地の分譲と鉄道開通に先立
ち、会社は「如何なる土地を選ぶべきか、
如何なる家庭に住むべきか」と題する沿線
住宅地案内のパンフレットを出した。明治
四二年の秋に大阪市内の各方面に配布した
らしい。このように、鉄道敷設と併行して
土地住宅経営を計画し、実行したものとし
ては、この例が我が国最初のものと考えて
いだろう。そのパンフレットでは田園的興
味ある生活の欲求に応える理想的な家庭を提
供するものとして「模範的郊外生活」(池田
新市街)を紹介している。しかし、当初は
すでに述べたように、需要の顕在化に不す
もあつたとみられ、賃家(家賃一三圓以



日本植物协会出版物第三号



日本語版会員登録第一号



片頭畫面出處：老甲哥

二五圓まで）供給、即金分銀、貸地方式など柔軟な対応を可能として実施している。

を建設して、居住者の懸念はかかる」と考へていたようだが、これは失敗したらし
い。いずれにしても、約百坪の敷地割とし
住宅群型（天型・地型・日型・月型の四つ
の主型）、アーチ型、アーチ兼天型、アーチ兼
地型、アーチ兼日型、アーチ兼月型など

の住宅タイプ」を準備して分譲住宅事業を開始したことは、今日の住宅供給の原型として注目されるべきであらう。

こうして北大阪地域における住宅地形が確立され、さらに阪神間での土地住宅事業での阪急電鉄の地位は確立されるわけであり、箕面桜ヶ丘での住宅改進博覧会は、その初期を飾るイベントのひとつであつたとも言えよう。それはまた、当初は和風住宅が主であつた中流住宅の普及において、合理的生活の実現を目指とする建築家の意識と役割が、本格的に機能化はじめた関西でのメルクマールであるとも考えられる。

生活改善と博覧会

明治末から大正初めにかけて、建築家の意識も変化し、住宅問題や都市問題に関心をもつ人々が出てきた。それは建築家のみでなく、経済学者や法学者を含めての動向であった。建築家の動きについては、すでに述べた中流住宅の提案とは別に、後藤田信一郎などによる考査や活動があり、それは大正中期以降の生活改善運動や文化生活運動につながってゆく。それ以前には歐米の合理的生活の啓蒙化の運動として、明治三十年代末に『家庭の友』や『家庭雑誌』などが創刊され、弊利庵によつて『簡易生活会』なども組織されていた。

このよつた新しい生活像の追求は、明治初期以来の各種の博覧会活動と結びつき、大正四年には上野公園不忍池畔を会場に、五月から六月にかけて「家庭博覧会」が開催された。これは国民新聞社を主催者とするもので、家庭問題をテーマとした最初の



阪急が開発した池田室町住区地
——「開拓本王開拓山」算額書類より



医師間の開業地分布状況(明治41~43年)



阪神間の市町村分布状況(大正10—15年)

8

「婦人子弟博」ことも博などの他に博覧会とは称されていないが、「生活改善展覽会」「婦人子弟博覧会」や「広報雑誌展覽会」「時服覽會」などは日常生活改良の動きと結びついたものであつた。その中で、「生活改善展」はその後の生活改善運動と関連するものとして注目されよう。

大正八年一一月から翌九年一月にかけて、當時のお茶の水の東京教育博物館（国立科学博物館の前身）で開かれた「生活改善展」をきっかけに、「生活改善同盟会」が結成される。その中に、佐野利器を委員長とする「住宅改善調査委員会」が設置され、大正〇年に「住宅改善六大綱領」を発表した。その内容はイスラームの積極的導入、接着本位から家族本位への価値構成の転換、衛生・防災の重視、庭園の保健・防災などへの実用化、家具の簡便堅牢化、大都市でのアパートメント並びに田園都市の施設の充実度であつた。それぞれの項目については大熊忠邦、今和次郎、田村順、木暮裕一、前田松韻、福田重義などを特別委員として詳細検討を依頼していたらしい。

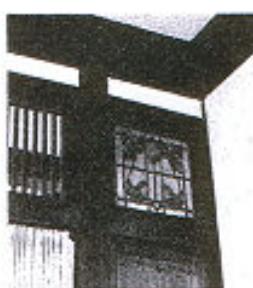
本格的な試みであつたと言われる。同じく大正四年九月には報知新聞社が中流住宅を大正五年には大阪朝日新聞社が中流住宅の古所を対象とする懸賞設計の募集を行ない、ジャーナリズムの活動もいよいよ本格化し始めていた。



黙智の天井



サイドボート部分



文堂、馬閣樓



階段開き場の平たい、便器

近代化の啓蒙と普及活動を展開した。さらに大正・昭和戦前期において数多くの住宅懸賞設計を実施し、住宅改良運動をリードしていたのである。その中で、後者による大正一〇年八月と一一年一月の二回の改良住宅懸賞設計は、住宅改修博覧会準備委員会によって、当選案が必ず実施されることが約束された初めての本格的な企画として注目されている。ちなみに、日本建築協会による設計競技としては、大正九年二月の「連続四戸建」（大阪住宅經營株式会社と共催）が最初のものであった。

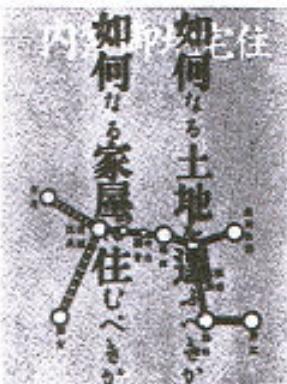
社会改良と都市政策

明治末以降の建築家の社会意識の成立に対応した方向としては、さらに都市問題への注目があげられる。それは建築学会の発行していた『建築雑誌』での西田信一郎や今和次郎、佐藤功などの考察に示されており、学会大会講演「建築と文化生活」（一九二一年）とはやや方向を異にするものであった。また、その背景には社会全体における都市の居住環境の悪化に対する注目があり、それは当時の紹介調査や改善協議会の設置にも示されている。こうした中で、建築家として最も中心的役割を果たしたのが佐野利一、片岡安などであり、経済・社会分野では渡辺鉄蔵や関一、政治・行政では後藤新平、池田玄であると言えよう。

当時の都市計画、社会事業の担当官庁であった内務省において、内務大臣を会長とする都市計画調査会が発足したのが大正七年である。その前年には内務大臣の後藤新平を会長とする都市研究会が発足していた。そこには池田、渡辺、片岡、佐野などが参加しており、近代的都市計画制度の整備を目指して活動していた。同六年には関西建築協会（日本建築協会の前身）、都協会、住宅改良会などが設立され、建築学会や建築士会とともに、都市計画法規の制定を陳情したのである。こうして都市政策、住宅政策においても戦前期のもつとも



筑地有馬電車（阪急電車）開通ポスター（明治43年）——「明治大正図説」（2）筑摩書房より



阪急の宅地販売パンフレット（明治42年）——「明治大正図説」（2）筑摩書房より

注目すべき一〇年間が始まったと言える。

建築学会大会の議題としては「都市計画」（大正七年）、「都市と住宅」（同八年）、「都市住宅問題と本会の決議」（同）がとりあげられ、都市計画行政としても大正七年には市区改正条例改正（六大都市に準用）、都市計画調査会官制公布、内務省都市計画課の設置などが行なわれたのである。そして翌年には都市計画法、市街地建築物法が公布され、さらに大正九年には都市計画委員会の発足と物法の六大都市への施行が実現した。

このような都市計画や住宅問題への关心においても大正九年には都市計画・建築行政関係機関が設置された。それは大阪府内務部の都市計画課、警察部の建築課、都市計画大阪地方委員会（事務官、土木・建築・公園関係の技師、技手などから成る）大阪市の都市計画部であった。また、東京高専教授であった關一は、すでに大正三年には招かれて池上大阪市長の高級助役に就任していたし、東京では後藤新平が大正九年に市長となっている。

一方、社会政策・住宅政策としては、經濟事業調査会の官制公布とその答申としての「小住宅改良要綱」の発表（大正七年）、内務省社会局の設置（同九年）、社会事業調査会官制公布、住宅組合法公布、借地・借家法公布（以上大正一〇年）などが実現し、そこで活躍していたのが渡辺鉄蔵や関一であつた。しかし、住宅組合法とともに住宅政策の両輪として構想された住宅会社法案は流産してしまった。

ちょうど同じ大正一〇年の四月に発行された「会社通観」（農商務省編纂）という資料がある。それで当時の土地・建物関連会社の状況を知ることができる。いわゆる土地会社の早いものは明治初期から存在していたのであるが、東京、名古屋、京阪神などの都市部では大正六年頃から急増し始めたようである。当時これらの地域に存在していた約二九〇の土地建物会社のうち、六割以上が六年以降の三年間に設立されたも



空間より台所に続く廊下



玄関土間のタイル



手摺が優雅な曲線を描く

のであった。これらの土地建物売買、不動産賃貸会社は商業に含まれ、運輸業に属する鉄道会社は入っていない。このよつた大正期の土地会社アームに対し、住宅会社

法案はどんな役割を期待されていたのか、今後の研究に待つほかないが、ひとつの大きな転換期であったことは確かであろう。

こうした状況の中で、関西建築協会との雑誌（のちの「建築と社会」）は、建築設計、住宅計画、住宅政策、都市政策などに関する情報と意見交換の場として重要な役割を果たしていたのである。当時の大都市圏では、郊外電車の発展とともに多くの郊外開発と工業化の進展とともに多くの都市化によって周辺部には中小都市の形成が目立つていたが、このような急速都市化の方向に対して、都市計画の集中主義と分散主義などの論議が展開されていた。さらに関一は第三の方向として田園郊外論を公表しておいた。そして、

関西において、こうした論議の場を提供していたのは、主として「建築と社会」と、大正一四年一二月以降の大阪都市協会による雑誌「大大阪」であったと言えよう。

日本建築協会と住宅改造博

大正六年二月末に始まった関西における建築家の団結と意思疎通をはかるための組織化の動きは、片岡安、波江悌夫を中心として三月三〇日には早くも創立総会を大阪ホテルで開くにいたった。その日、理事長片岡安、理事武田五一以下四名で発足した会は、関西建築協会と称していた。当時の記録によると、一〇年前より継続してきたその頃、浜市役所から大阪の茂野村建築事務所に移った佐藤四郎によると、二月二十七日に堂島の魚岩という料理店で三〇人余りの大坂の建築家が集まり、大阪にも建築学会のような建築家の団体が欲しいといふ話が出だらしい。さらに建築学会は学術

的すぎるから、もうと建築の社会的な面を開拓していく、ということでの講壇の喝采を博し、一ヵ月後の発足となつたという。

その後、七月には雑誌発行が議決され、武田五一の表紙圖案を得て九月には創刊号が生まれた。それ以後、都市計画、住宅問題、社会政策などの論文、記事を掲載し、一方では法規制定の陳情活動を展開していたようだ。

今林彦太郎によると、「この頃片岡さんが中心で建築物法ができる。最初の博覧会にいたるまで、協会で骨を折ったのは建築物法で、各國の建築条例や論文を翻訳しろ、というわけで割り当てられてやつた。最初の雑誌から見ると各号ともものつている。さらに大正七年一二月には協会の第一回大会と通俗講演会が開かれ（関一・佐野利器・片岡安・葛野一郎・直木倫太郎の講演があり）、九年二月には最初の住宅設計懸賞募集が行なわれた。

桜ヶ丘住宅改造博は、このよつた協会活動の基盤のうえに、いつそうの發展を目指して企劃されたとも考えられる。大正一〇年二月五日の新田理事会において初めて、その秋に住宅改造博覽会を開催する件につき意見を交換し、会頭として後藤新平、副会頭として片岡安の名前があがつてある。この記録の限りでは博覧会の会頭、副会頭のよつて語られるが、他の記録と、その後の経過をみると協会の会頭、副会頭をも意味しているらしい。事實、それまで理事長をしていた片岡安は、この博覧会の副会頭をつとめたあと、ひきつづき協会の副会頭となつてゐる。

それはともかく、二月八日の理事会においては会場や期日、予算、施設などについて協議し、会場としては天王寺公園があつていることが注目される。会期は、その秋か来春とし、懸賞募集の件も明示され、準備委員会の組織化を決めている。その後、期日は不明だが住宅改造博の準備委員として片岡安、宗兵蔵、武田五一、日高、波江など三十四人の名前が記載されている（以



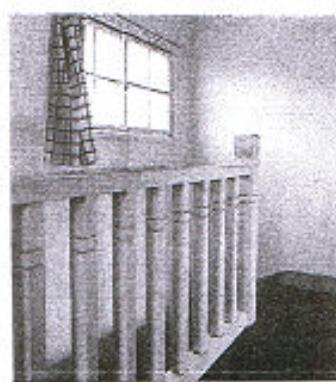
「建築と社会」前刊号



住宅改造博覽会場 幸喜提供——須賀栄一氏



壁瓦積みの基礎



二階建設ホール手稿



格子窓

上、「建築と社会」大正一〇年三月号)。その

一ヵ月後、三月一〇日の特別理事会では期日が来秋に決定している。そこには建築学会員会の意向が反映していたようだ。また、建築学会会長中村達太郎あてに、援助依頼状を理事長萬野壯一郎名で出した記録があるが、その後の経過は不明である。

一方、五月一〇日の臨時理事会で会場敷地として住宅地提供申し込みを受けた件、八月二十三日に予定地変更の件、一月、一二月には会場内定と実地検査の件が出ていたが、具体的地名は記されていない。雑誌のうえで具体的敷地が明らかになるのは翌一年七月号の住宅改造博覧会記事(地図付)においてであり、同時に土地所有者田村真策の名前も示されている。

こうして博覧会場は、天王寺公園から、箕面有馬電鉄が大々的に郊外住宅地を売り出していた大阪北郊箕面の桜ヶ丘に変更され、「五戸の住宅作品、家具、建築設備、材料、部品、園芸などが展示された。出品

住宅の内訳は懸賞設計入選图案による協会出品の八戸のほか、横河時介氏、萬野建築事務所、眞水三橋建築事務所、鶴池組、大阪飯橋本組、鐵商組、横田組、清水組、あめりか屋、田村地所部、大阪住宅經營KK、各一戸、片岡建築事務所、竹中工務店、大林組各二戸であった。

これらの住宅には明治三十年代以降、約二〇年間の生活改善、住宅改良運動の成果が集約されていたと言えよう。それはまた、モダンでスマートな中流住宅の理想像でもあり、箕面有馬電鉄によって開拓された郊外住宅のセールスと、大正期の花形イベントである博覧会の興行性と、普及しつつあった懸賞設計とがミックスされたものでもあった。また、そのような企画の先駆だとも言われる。

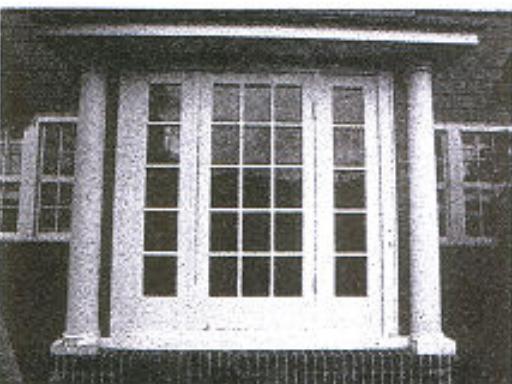
しかし、翌一二年の報告書によれば、売れたのは五戸であり、協会出品の八戸もすべて土地所有者田村真策に引渡されている。会場変更のいきさつから考えると、この田村氏が理想住宅地を取りこんだのかも

しれない。

報告書によれば「田村氏は水道の設備を完成して居住者に便宜を与へ本会(協会)事務所に使用せる建物は桜ヶ丘俱楽部とし、又田村地内に五戸建長屋を建設して売店其他の經營を計り、桜ヶ丘は元実せる住宅地となりつつある」という。だとすれば、高石市の伽羅橋園や神戸市東灘区の文化村、芦屋市の三宣莊と同じく、ユートピズムにとりつかれた地主の寄与も大きいであろう。いうまでもなく、同年三月、上野公園での平和記念博覧会でも文化村が評判を呼んだ。しかし、興行的には大失敗といわれたこの博覧会で、会期中に売れたのは数戸だったという。とすれば、桜ヶ丘改造博は地主との提携によって、うまく成功にむづいていたと言えるかもしれない。

ところで、日本建築協会の大正一〇年三月時点の会員数は二〇二名であった。一方、

地方会員は六五名、名誉賛助員六〇名、終身賛助員四八名、特別賛助員一四名、普通賛助員三三七名、合計七二六名であったから、賛助員の果たす役割はかなり大きかったと思われる。しかし、この博覧会を開くことで活動基盤が確立したらしく、その後着実に会員数は増加している。こうして中流住宅の改良と郊外住宅地の普及に協会は大きな役割を果たしたが、一方では市街地の四戸建長屋の懸賞設計などにより、居住環境の改善にも寄与した。大正末から昭和初期においては、大阪市内における区画整理地区での長屋も郊外住宅としてセルスされていたようであり、近郊と遠郊という二つの郊外、あるいは多様な郊外住宅地が形成されつつあったと考えてよい。その中には住宅組合による住宅地も含まれるであろう。



三室延の住宅



文化村住宅の内部



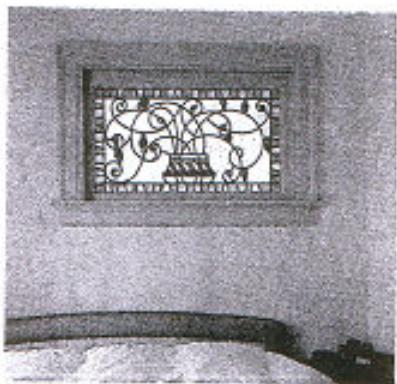
伽羅橋園の現存住宅



主圖源



主圖源の換気孔



元庄園のステンドグラス

本稿の記述には山形政昭、内田青義、近江俊、三輪泰男、坂本雅比古、水谷頼介、吉田尚子、中川理の各氏の著書、論文を参考にし、奥山信氏の協力を得ましたことを記して謝意を表します。

裏面と言えば関西ではミノオの滝、紅葉、城で有名な所である。今では郊外と呼ぶにふさわしいが、その昔、大阪府豊能郡箕面村と呼ばれ、かなりの田舎で、「桜ヶ丘」の付近は、竹林があちらこちらに点在する何もしない丘陵地だったという。そこに住宅改造博覧会場が忽然と現れ、二ヵ月後に祭が終り、あとに一風変わった一群の住宅が残った。赤、青、緑の瓦、とんがり屋根、白い壁など当時の人々にとってはまさに丘の上のユートピアのように思えたに違いない。

現在この住宅地には元事務所を含めて一三戸が、そのまま残っている（五年前には一五戸であった）。何げなく見て通れば、普通の高級な住宅地と見過され、

桜ヶ丘住宅調査後記

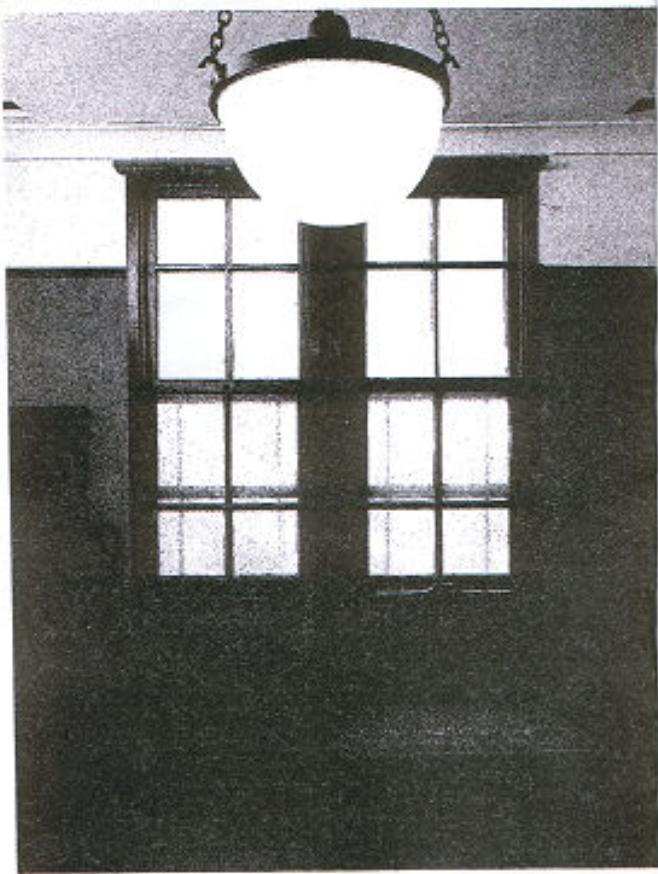
石川康介

「桜ヶ丘」のいわれも知る人ぞ知ると言つたところだろう。それはいかにも時代の経過を感じさせるもの、最近新築されたかのよに見えるもの、倉々と壇上立つもの、元の形とはほとんど変わらないもの、増改築されたもの、と様々である。幸いにも現存の全戸について調査取材を許された。つぶさに見ると玄関構え、内部ホール、居間、階段室、暖炉、屋根の形などバラエティに富むデザインである。出品者は互いに競い合つて当時最新の試みを追求したのである。ここには大正モダンデザインそのものが残っている。

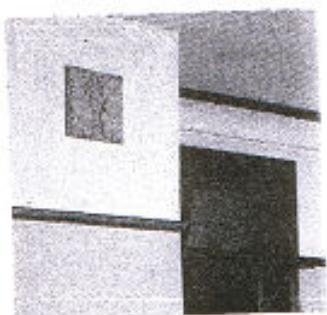
しかし五十年の変化は大きい。生活が嘗まれる住宅も例外ではない。ここでは水流トイレ、温水暖房など時代の先取りもあつたが、生活改善のための住宅改修という目的を持つた家であるが故に、心地が良いという話も切つた。六〇年程前のタチマエは、現実のホンネには勝てなかつたということだろうか。

調査をしつつ、個々の住宅と共に「桜ヶ丘」全体も新陳代謝しつつあると実感させられた。住宅地のある一帯では新たな建設が進んでいたし、ある日突然のよう消えてサラ地と化した所もあつた。これら大正時代生まれの住宅は今まで以上に愛護することが予想される同時に、減び行くものののみが持ち得る美のようなものをおとせじることもあつた。

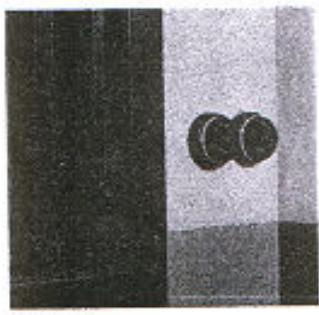
最後に今回の我々の調査を快く引き受け、盛力戴きました「桜ヶ丘」の音様に、心よりお礼を申し上げます。



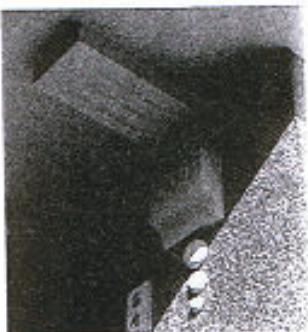
香斎の家具



壁紙の複数のレリーフ



電灯スイッチ



階段の持込み



玄関ホール

4 土

生活の改善を目指した家族本位の間取り

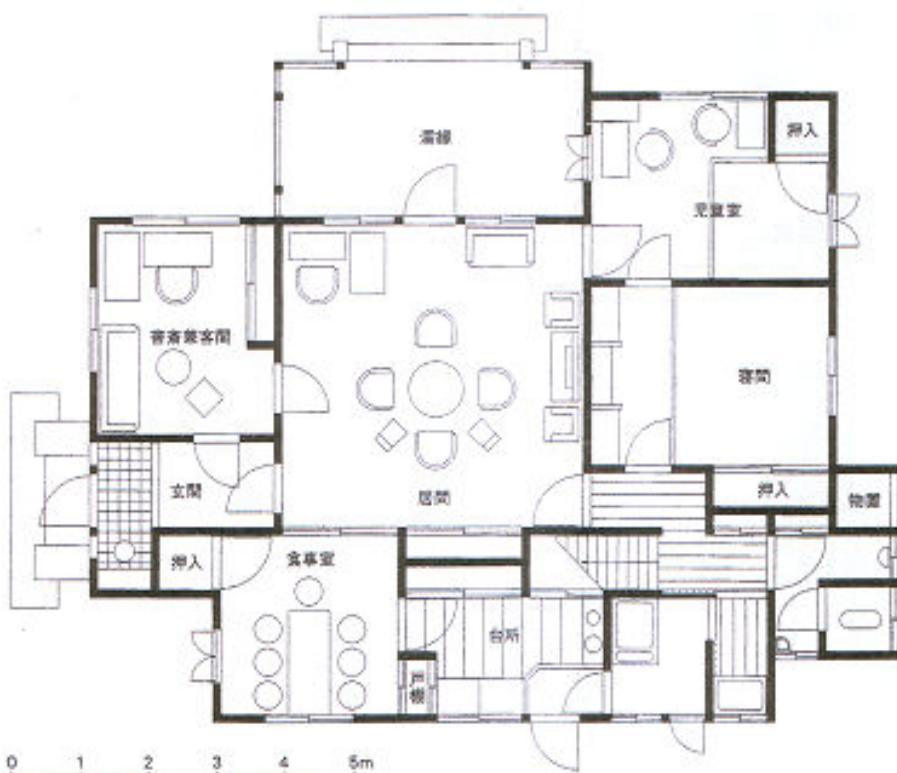
文化住宅

大正期も半ばになると、住宅改良運動は、すまいのより本質的な問題の改善へと向かっていく。文部省の主導のもとに生活改善同盟会が結成され、二重生活をやめて椅子式に改め、家族の生活の場を第一とする家族本位の間取りにすべきである、という啓蒙活動が盛んに行われた。

1922年、東京と大阪で開催された二つの住宅博覧会は、こうした新しいすまいのモデルを、具体的な实物展示で人々に訴えるものだった。「文化住宅」と呼ばれる斬新な住宅には、家族本位を反映した居間中心の間取りに加えて、家族室、主婦室、子供室といった部屋が登場している。



外観。外壁は白の漆喰と下見板張り。白く塗った窓枠が、洋風の佇まいを見せている。写真=「平和記念東京博覧会出品文化村住宅設計図説」より



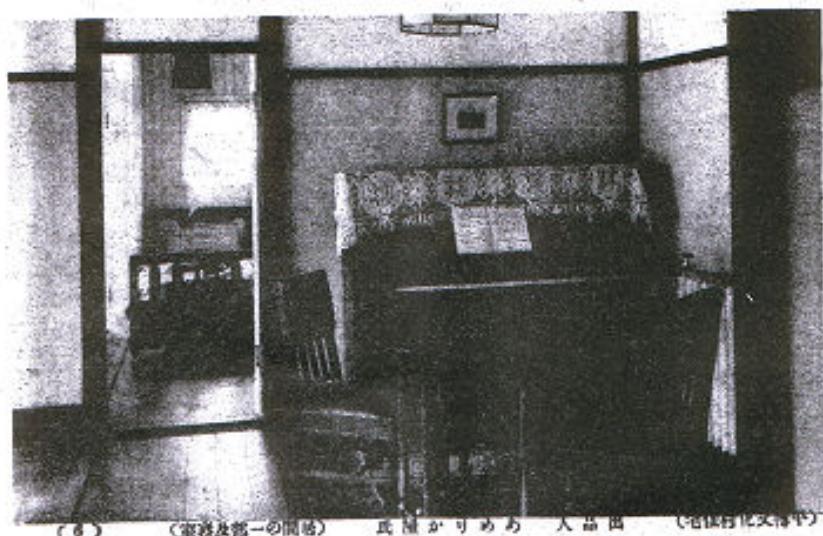
平和記念東京博覧会の文化村に、生活改善同盟会が出品した住宅。「二重生活を軽減する改善住宅」と類されているように、すべて椅子式であり、家族本位を実現した居間中心型のモデルとなるような間取り。ただし、寝室と児童室の一部の床を高くして畳敷きとした。文化村の成果をまとめた「平和記念東京博覧会出品文化村住宅設計図説」の著者・高橋仁には、「生活改善の主旨からいって不徹底」と指摘されているが、椅子式に移行させようとする過渡期の工夫であったのだろう。1922年。25.25坪。

文化村に出品された住宅の室内。洋式が圧倒的に多く、さまざまなデザインのテーブルや椅子が並べられている。上 ピアノが据えられた居間の一部と、奥の寝室。あめりか屋出品の住宅。

中 応接間から子供室を見る。筑高組東京支店出品の住宅。

下 広くとった居間の奥に、小さな書斎兼応接のコーナーが設けられている。上遠喜三郎の出品住宅。

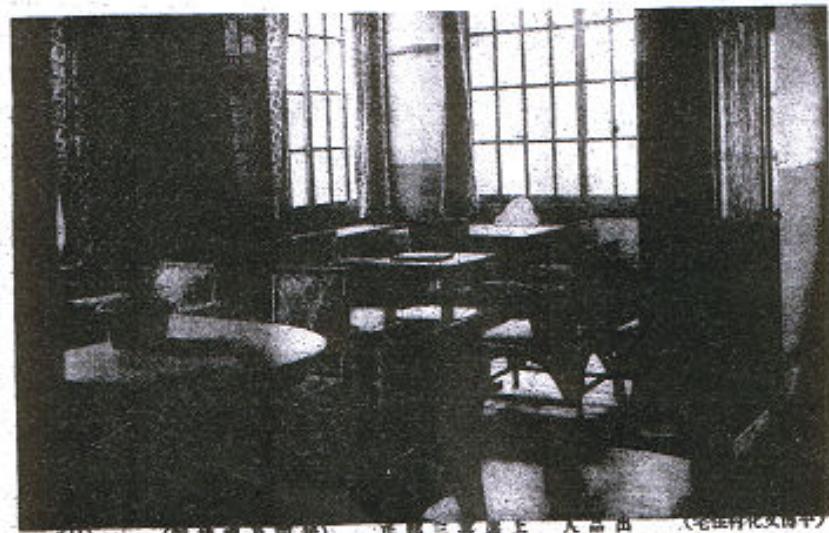
写真=3点とも「平和記念東京博覧会絵葉書」 所蔵=内田青霞



(上) (豪華及第一の間室) 武種かりみあ 大品出 (名作行化文庫)



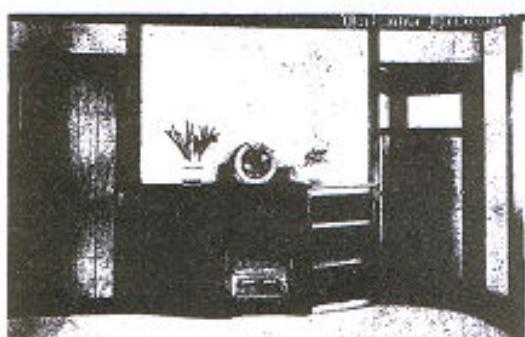
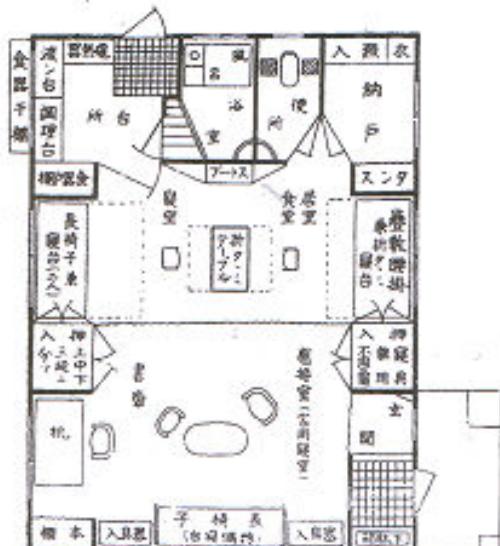
(中) (間の奥する代見りよ間接室) 武種支店東京支店 大品出 (名作行化文庫)



(下) (豪華及豪華) 武種三吉著 大品出 (名作行化文庫)

4

平和記念東京博覧会文化村

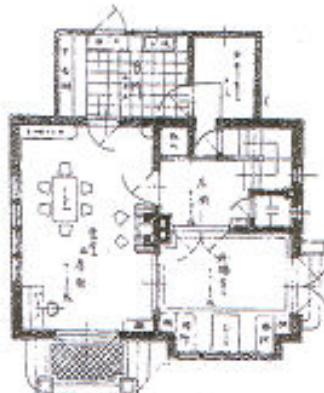
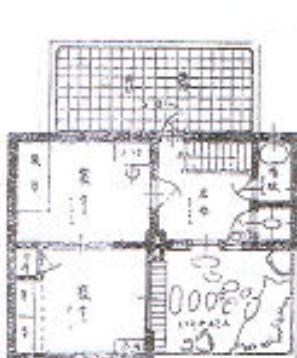


1922年3月から7月までの間、上野公園で平和記念東京博覧会が開催され、その一画の「文化村」に、14棟のモデルハウスが展示された。これは建築学会の田辺津吉を委員長として企画されたもので、応募出品したのは、生活改善同盟会などの団体や、アメリカ屋などの企業と建築家である。出品された14棟中、7棟が家族本位のすまいを具体化した、居間中心のプランを展開している。

生々園出品「数人の家族を抱擁する一間の家」の間取りと室内。バンガロー・スタイルを基調としていて、簡易生活を営むにふさわしいと評されている。居間兼食堂の正面にストーブを置くマントルピースが設えられ、右側の二つのドアは納戸と便所に、左手は台所に通じる。居間兼食堂に置かれた腰掛けや長椅子は折り畳み式のベッドとなっており、夜はここが寝室になる。テーブルも折り畳み式。12坪。



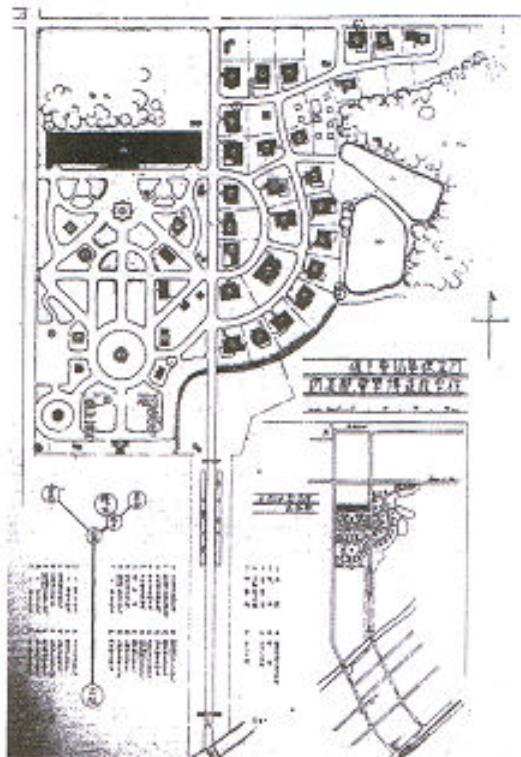
日本セメント工業出品住宅。出品された14棟の中で、唯一の鉄筋ブロック造。耐火耐震に優れ、2階に浴室、便所、庭を配することもできること、その特長を誇っている。1階居間の暖炉が2階にも通じ、1カ所で全室を暖房するじくみになっている。1階は女中室以外すべて洋風椅子式。約31坪。



（写真）（四月刊）上野公園にトネモキ木目 大島作（文化村を支持手）

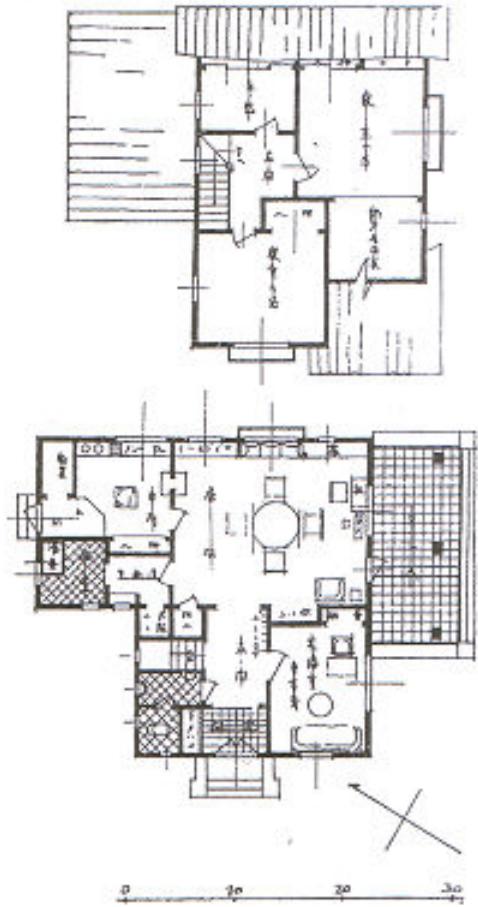
4

住宅改造博覽会

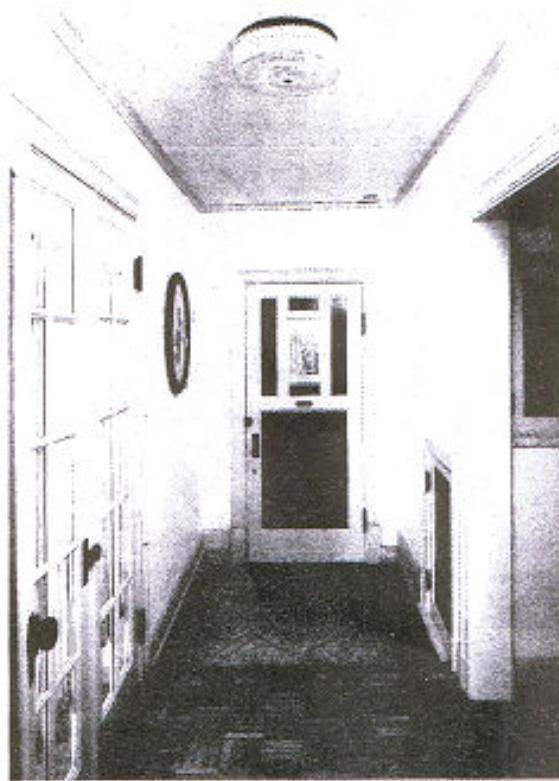


住宅改造博覽会配図。箕面有馬電鉄が大々的に売り出していた郊外住宅地「桜ヶ丘」で開催された。25戸の出品住宅のはかに、休憩所や音楽堂、噴水などもつくられている。図面はすべて『住宅改造博覽会図集』より 所蔵=東京都公文書館

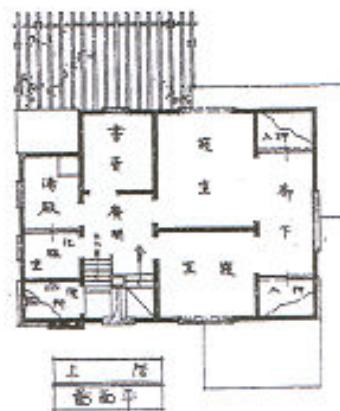
1922年10月から2か月にわたり、大阪北郊の箕面・桜ヶ丘で、日本建築協会主催の「住宅改造博覽会」が開催された。25戸の住宅作品が展示され、その内訳は懸賞設計入選図案による協会出品8戸のほか、あめりか屋、鐵高組、竹中工務店などの住宅施工会社や設計事務所などである。この住宅作品のうち、3戸の間取りを紹介する。



鷲池組出品住宅の間取りと居間の一例。木造2階建て。玄関を入って奥き当たりにある横長の居間を生活の中心の場としている。1階は洋風、2階は畳敷きの純和風。写真は居間東側につくり付けられた収納棚付近。約39坪。



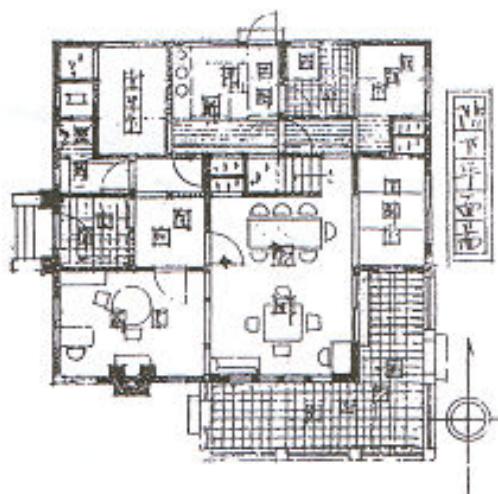
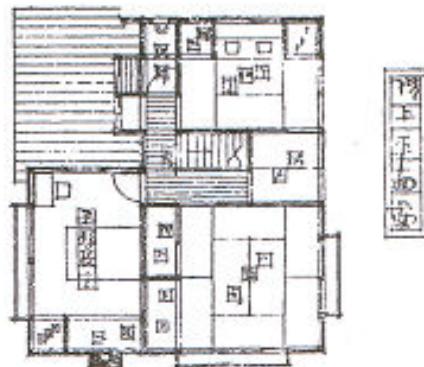
横河時介出品住宅の間取りと玄関ホール。木造3階建て。アメリカのコッテージ風を意図して設計された。3階屋根裏に給水槽が置かれ、出品作品のうち唯一浴室を2階にもってきたプラン。女中室・化粧室以外すべて洋式のつくりである。60坪。



0 7.0 2.0 7.0 4.0



日本建築協会出品住宅第6号の間取りと書斎。木造2階建て。玄間を入り、さらに片開戸を開けると玄間ホール。ここから書斎、居間兼食堂、奥の女中室や台所につながっている。猿瓦積みの暖炉のある書斎は、椅子や丸テーブルなどの家具類も当時のままである。36坪。写真=3点とも相原功 (1988年撮影)



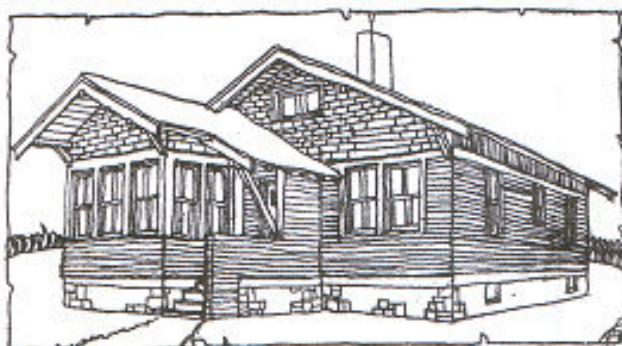
文化村・住宅改造博における 新しい間取りの提案

内田青藏

住宅改良会の設立と機関誌「住宅」

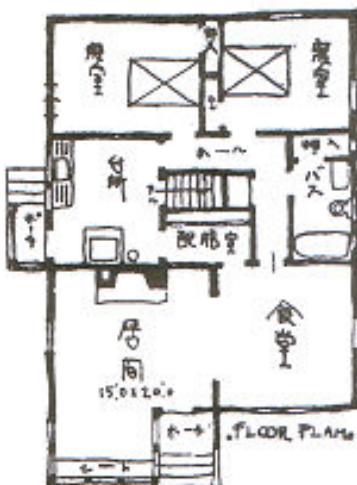
大正期になると、住宅改良運動の内容は質的变化を見せることになる。一九一六（大正五）年、あめりか屋店主橋口信助を会主とする戦前期の住宅改良運動の主要な役割を担つた住戸改良会が組織された。そして、機関誌として住宅専門雑誌『住宅』が創刊され、住宅の問題を広く議論する専門の場が用意されることになる。この雑誌の出現や生活全般の見直しの気運もあって、住宅改良の主眼点もそれまでの在来住宅の物理的な欠点の改良から、すまいのより本質的な問題の改善へと移行していく。すなわち、床座から椅子化の動きとともに、それまでのすまいが接客の場や主人の場として用いられていた座敷を第一に考える接客本位のものであつたと批判し、これから新しいすまいは家族の生活の場を第一とする家族本位のものとして考えることを求めたのである。それは從来のすまい像の否定であり、在来住宅を捨て欧米住宅に全面的に改めるなどを意味していたのである。ただ、その家族本位のすまいが具体的なかたちを伴つて提示されたわけではなく、それゆえ、大正中期には家族本位のすまいを具体化することが当面の主要なテーマとなつた。

このような議論のなかでしばしば主張されたのは、それまでの座敷の場と家族の生活の場の位置を取り換えるという意見であった。具体的には、座敷や次の間は庭との関係や日当たりから見て南側の最も住環境のよい場所に設けられていたのに対し、家族の生活の場は北側の陽の当らない小さな部屋であつたため、それらを入れ換えて家族の場を最も大きな部屋でかつ住環境のよい場に設けるべきだという提案である。また、当時あめりか屋の活動などを通じて普及し始めた洋風住宅は、玄関からじかに入る部屋が「居間」と呼ばれ、家族の生活の場に用いるようになっており、その間取りの特徴が見直されていった。そして、数ある洋風住宅の中でもアメリカのバンガロー式住宅は、座敷などの接客の場という格式を意味する場を排除した住宅として注目されることに



文化住宅

大正期に流行したバンガロー式住宅の外観と間取り。写真=『バンガロー式明快な中流住宅』（大正11年）より



なる。たとえば、イリノイ大学出身でアメリカ住宅に精通していた東京高等工業学校（現東京工業大学）の建築科長であった滋賀重列〔「パンガローの特長」〕〔住宅〕大正八年二月号は、パンガローについて以下のように述べている。

「パンガローは居間が中心で、客間の如きバアラー、ドロイングルームなどほとんどないと云つても差支えない位で、居間と食堂と広間と寝室と台所と配膳室、浴室が主で、玄関の間又は下婢室などに至つては主要条件となつていな（後略）」

このように、パンガローは「居間」が中心にできており、「ドロイングルーム」などの接客の場を設けない住宅形式であることが述べられ、新しい住宅のモデルとして注目されていた様子が窺える。

東京と大阪で開催された二つの実物住宅展

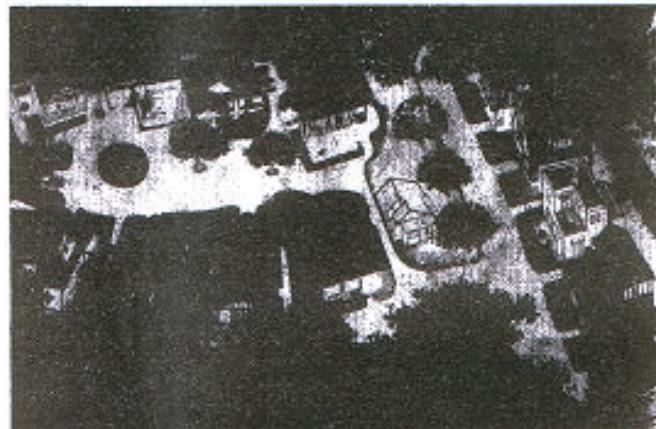
ところで、一九二二（大正十二）年になると、偶然にも東京と大阪で住宅の実物展示が実施された。東京は第一次世界大戦の終結による世界平和の到来を記念した平和記念東京博覧会が開かれ、会場に文化村と称された一画が設けられ、実物住宅が十四棟並べられた。また、大阪は桜ヶ丘の分譲住宅地を会場として二十五棟の実物住宅が建てられた。その目的は、住宅改良運動の中で追求された住宅を一般の人々に実際に見せ、今後の新しい時代に適合した住宅づくりの参考にもらうためであった。また、当時、社会問題としての住宅不足を解消するため、政府は中産階級以上には資金を貸し付け自前で住宅を建設する持ち家政策を打ち出し、同年七月から住宅組合法を施行することが決定されていた。このため自前で住宅を構える中産階級の人々がモデルとなることでのける中小規模の新しい住宅の出現が求められていたのである。そのため、素人でもその住宅の良さを理解できるように図面や模型という従来の方法を超えた实物展示という方法が取られたのであった。ちなみに、この住宅だけではなく家具や食器といった生活用具も一緒に展示する、实物展示という方法は、住宅地分譲などの際の手法としてこれ以後定着することになる。

家族本位を主眼とした間取りの提案

この二つの実物住宅展の住宅の間取りに注目すると、その多くがまさしく家



2



1

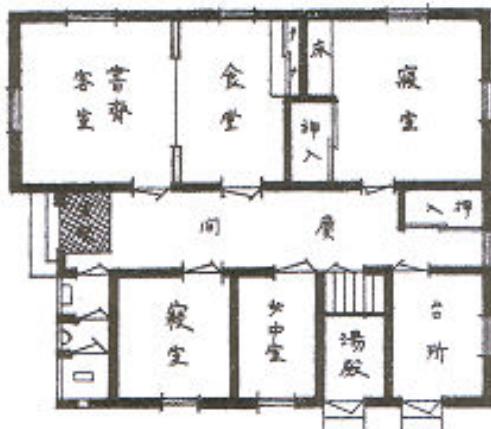
- 1 文化村の鳥瞰図。14棟の住宅が実物展示されている。
- 2 「婦女界」の付録になった「平和博覧会案内」。折り畳み形式のパンフレットで、全出品住宅が写真入りで紹介されている。
- 3 「平和記念東京博覧会出品文化村住宅設計図説」（高橋仁善、鈴木書店、大正11年）。全出品住宅の仕様書、平面図、立面図、外観写真、解説などが掲載されている。



3

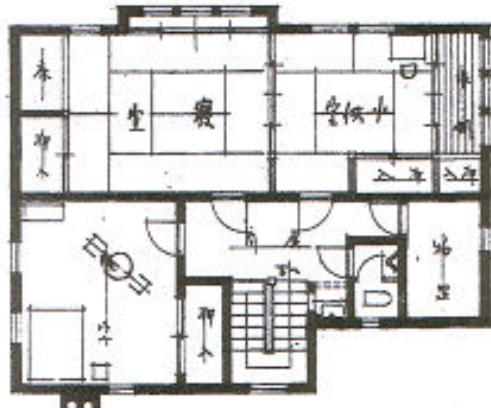
族本位を主眼とした住宅であり、住宅の中心である家族の部屋を文字通りに「家族室」と称した住宅も見られることに気づく。具体的には、最も大きな部屋が家族の居間として設けられ、しかも、新時代にふさわしく椅子座として計画されていた。また、独立した寝室が見られるなど個室化も進んだ住宅であった。そしてまた、東京の文化村の出品作品の多くは椅子座を推し進めるために、床座を促す畳の代わりに寝室の床をコルク敷きにするという新しい試みも行われていたのである。一方、大阪の出品作品は、展覧会後にそのまま土地付きで分譲することもある、単に理想を追求したというよりは実際に生活のできる現実的な間取りとなっていた。すなわち、家族本位の表現として、家族の場と座敷の位置を逆転させることはもちろん、ラディカルな主張としては接客の場を完全に否定して座敷や応接室の無用論まで展開されていたが、現実的には接客の場の完全な否定は難しかった。そのため、出品作品の多くは南側に家族の生活の場として居間を確保するとともに、その横に接客の場としての小さな応接室を併置させた間取りを採用した。

なお、この実物展の作品の多くは、洋風の外観が大半を占めていた。それは、明らかに新しい住宅として洋風の住宅をめざしていたことの現れであるが、様式的にはバンガロー様式をもとにしたものが多い。それは、先に見たようにバンガロー様式が家族本位の住宅として見られていたことの影響である。また、このバンガロー様式を含めアメリカの住宅の影響を受けたものが多く、文化村の出品作品にはアメリカの工法を採用した住宅も見られた。わが国の住宅は、この頃からアメリカ住宅とは不即不離の関係をもち始めつつ変化し始めたのである。

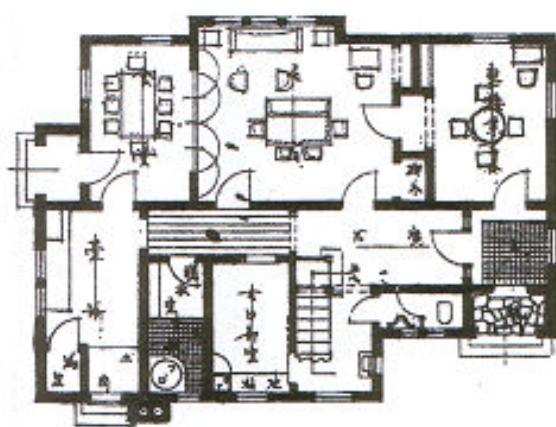


右 住宅改造博覧会に出品された「家族の場と接客の場を併置した間取り」の例。南側の最もよい場所に広く居間をとり、玄関脇に小さく応接間を配している。

左 文化村の出品作品の中でも、アメリカの工法であるツー・バイ・フォーによる住宅例。所蔵=すべて内田青蔵



2階



1階

COLUMN

ナオミと暮らした家 『痴人の愛』に見る文化住宅

河合謙治が、十五歳ほどのカフェの見習いウエーテレス・ナオミに「一日惚れし、同棲して肉体に耽溺していく。官能美を前に、人間は痴人のような存在になり果ててしまう」と、谷崎潤一郎の『痴人の愛』。関東大震災の翌年、大正十三（一九二四）年に新聞連載され、大きな反響を得た。

謙治は世帯をもつような面倒臭さを嫌った。ただ、ナオミという少女を友達にして、彼女の成長を眺めながらままで遊びの気分で暮らすことを夢見たのだ。ナオミと最初に暮らした家は東京・大森を最寄り駅とする、おとぎ話の挿絵のような家だった。

赤いスレートで葺いた急勾配の屋根、マッチ棒のように白い壁で包んだ外側。ところどころに切ってある長方形のガラス窓。ある窓が、モデルである夫人と暮らすために建てたという物件らしい。

「いやにだらり広いアトリエと、ほんのささやかな玄関と、台所と、階下にはたつたそれだけしかなく、あとは二階に三畳と四畳半とがありましたがけれど、それとて屋根裏の置小屋のようなもので、使える部屋ではありませんでした。その屋根裏へ通うのにはアトリエの室内に梯子段がついていて、そこを上ると手す

りを続出した廊下があり、恰も芝居の棧敷のように、その手すりからアトリエを見おろせるようになっていました」

ナオミは「まあ、ハイカラだ」と、「すぐに気に入ってしまう。謙治のほうは「まだお粗末な洋館でした。所詮『文化住宅』と云う奴」と冷ややかだ。

家賃も月々二〇円と安く、暮らしてみると思ったほど不便ではなかつた。謙治は大井町にある電気会社のエンジニアで、公務員の初任給が七〇円だった頃、一五〇円の月給を貰っていた。越方出身で高学歴という彼のような人物が、当時の都市中間層を形成していた。

当時、アメリカニズムが流入するなかで、ハイカラでもダンといつた意味で『文化』という言葉が使われ、文化村、文化住宅、文化生活から、文化包丁、文化鏡などが流行した。『文化』は、明治維新からこの時代になっても打破できなかった封建的なカウンター・カルチャーとして、市中間層の理想の住宅像が文化住宅だった。特に急勾配で洋瓦葺きの建物は、大正期独特の様式といえる。

やがて年齢を重ねるとともに、ナオミは洗練奔放な性格をあらわにする。謙治は自由と自堕落との間で悩み始める。出産を拒否し、度重なる

不倫に走ったナオミを、一度は叩きの棧敷のように、その手すりからアトリエを見おろせるようになつて、

出されたものの、ついには拝跪する。そして手玉にとられるように、今度は横浜山手の洋館で借家暮らしを始めた。さらに、賃貸が身にしみるに

したがい、本牧のスイス人家族が暮らしていた家を家具ごと買い取る。

謙治は会社を辞職し、田舎の家を売り、合資会社を設立しナオミに尽くす。夫婦は別々の部屋で眠り、妻の寝室は二〇畳ほどもある。女王のような暮らしぶりで、つまづきと外国

人と関係し、淫奔な生活は現在も続いている。

奇想天外な恋愛哲学もさることながら、家が変わることに関係がエスカレートしていくという点に着目したい。モダンガールと評されるナオミの嗜好は、「ハイカラ」といつた文化住宅を起点に、しだいに本物の洋館に向っていく。その後、時代はどう動いたか。『痴人の愛』からは『文化』の擦り対する、谷崎の強烈なアイロニーが読み取れよう。

1 ナオミが「ハイカラだこと！」と気に入ってる最初に暮らす『文化住宅』。新聞小説『痴人の愛』の挿絵。絵=田中良、大正13年3月28日『大阪朝日新聞』。

2 家が変わることに、況り奔放な性格をあらわにするナオミ。同じく新聞挿絵。大正13年3月30日。

3 大正後期の流行語・風俗語を漫画絵葉書にした『文化生活とは』の表紙と中の絵葉書。震災後につまづきと新築された洋風住宅が『文化住宅』と呼ばれ、洋風=文化として、なんでも『文化』を付けた謔語が流行した。所蔵=日本漫画資料館

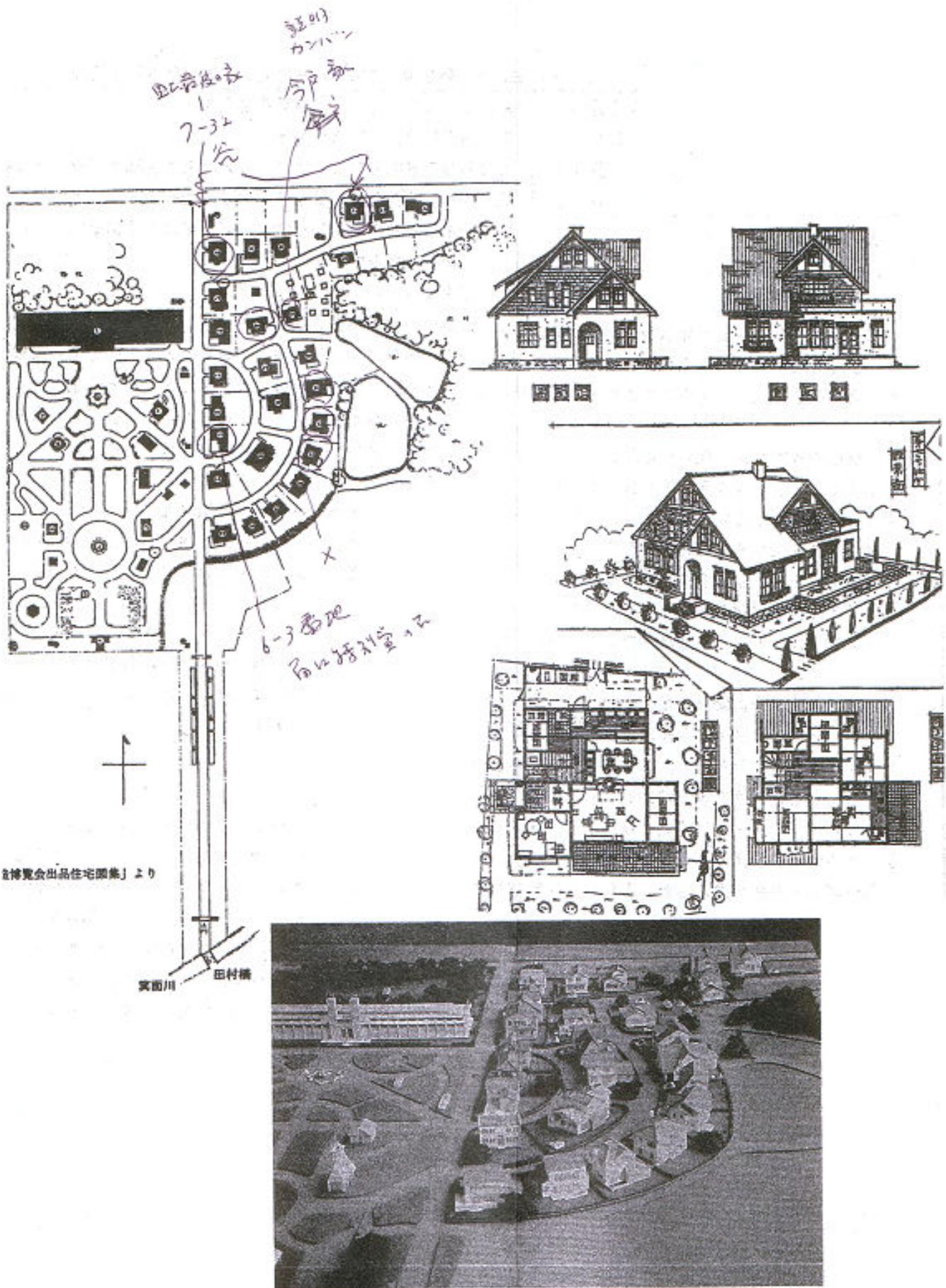


1



2

3



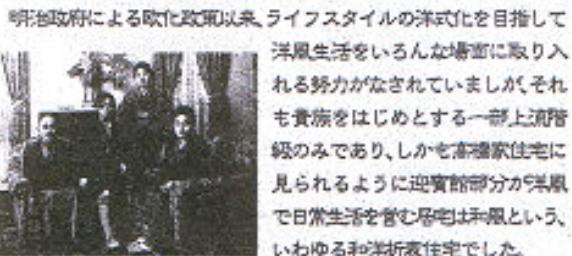
今、私たちは当たり前のように洋服を着、靴を履き、いすに座って食事をしている。フローリングにカーペットを敷き、カーテンの掛かった部屋で、ソファにくつろいでテレビを見るなんてこともまったく違和感なし。何でこんな風に暮らしているんだろう…なんてこれまで考えたこともなかったけれど、眞面目な桜ヶ丘にその答えの一つがあるなんて、これまた全然知らなかった。

都市景観形成建築物の周辺

「桜ヶ丘大正住宅改造博覧会」

●大正といら時代

大正デモクラシーと呼ばれる時期は、それまでの富国強兵、殖産興業のスローガンがやがて、生活と文化、社会へと関心が移りつつあったと言われています。産業革命による産業構造の変化によりホワイトカラー層の人口は増大、都市部へ集中することとなり、都市基盤整備が到底追いつかない中、住宅事情、生活事情の悪化が深刻化していました。また、生活改良イコール生活様式の洋風化と考えられていた時代であり、住宅の質の改良も洋式化を目指すものでした。



明治政府による欧化政策以来、ライフスタイルの洋式化を目指して洋風生活をいろいろな場面に取り入れる努力がなされていますが、それでも貴族をはじめとする一部上流階級のみであり、しかし高級住宅に見られるように迎賓館部分から洋風で日常生活を営む邸宅は洋風といふ、いわゆる洋折衷住宅でした。

●住宅改善運動の目指したもの

こうした時代を背景に、都市計画法、市街地建築物法の施行と時期を同じくして、日本建築協会を中心として住宅改善と郊外住宅運動が開始されました。

●公私室の分離、子ども室の確保など欧米の住宅に近い平面とすること

●暖房設備の必要性等を指摘

●また、「完全な家は、文化的で完全な土地にあって初めて実現される」という考え方につけて、

- ・交通の便利さ
- ・道路の整備
- ・上下水道の完備
- ・ガス電燈電話
- ・その他家庭用動力の安価な供給の必要性をあげ、便利、快適、衛生的、経済的な生活が実現すると主張していました。



●桜ヶ丘大正住宅改造博覧会

これらの主張の普及発展を目指して、大正11年、「東面有馬電気鉄道」が大々的に郊外住宅地を売り出していた大阪北部東面の桜ヶ丘において、日本初の住宅改造博覧会が開催されました。

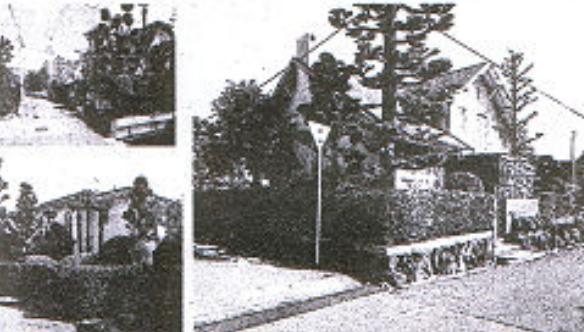
25戸の住宅作品は、博覧会終了後そのまま分譲することとなっていましたため、宅地造成や周辺整備は、そこで生活が営まれることを前提に本格的な工事が行われました。

この住宅地の特色として、半円の同心円状と放射状に道路が配されていますが、これは、ハワードの田園都市構想にちなんだ新しい郊外住宅地の形態です。(同様のものとして規模は異なりますが、住宅博覧会後1年たって造成された、東京の田園調布住宅地があげられます。)開催中は、約7万人もの入場者が訪れ、当時の最先端技術にため息をついたそうです。



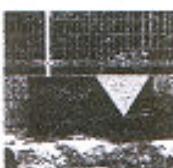
●そして現在

開催から77年を経た当時の博覧会場は、道路の形態など当時ままであり、そこに9件の出展住宅が現存しています。当時博覧会で提案された生活様式、住宅様式は、そのまま現在の私たちの生活スタイルになっています。この数年取り壊される家が多くなっていますが、住宅博覧会の意義が「文化的な郊外生活の提案」であったことを考えると、現在の「郊外住宅都市算面」を象徴する地域であるのみならず、現在の我々の生活様式の原点とも言える地域なのかかもしれません。



「住宅改

※大正住宅博覧会跡地は、「大正時代の洋風住宅がまちなみとして残る全国でも貴重な住宅地…住み手の詩りと愛着の深さによって更に上品な趣が増すことを期待したい」として、平成9年大阪まちなみ賞特別賞を受賞しました。



- (1)当時の都市景観を特徴づけている建物等
- (2)歴史的、文化的又は建築学上から価値のある建物等
- (3)市民に親しまれている施設等
- (4)前3号に掲げるもののほか、都市景観の形成のために市長が必要と認める建物等

箕面市都市景観形成助成要綱 第2条

助成の対象となる行為は次に掲げるものとする。

- (1)都市景観形成地区における現状変更行為等
- (2)都市景観形成建物の現状の変更
- (3)都市景観形成を目的とした市民団体が行う活動及び調査委託

箕面市都市景観形成助成要綱 第4条

市長は、前条の規定による申請があったときには、その内容を審査し、助成の額及び助成金の金額について予算の範囲内で決定するものとする。

箕面市都市景観条例 第17条

1 市長は、都市景観の形成を推進するため、規則で定める建物等で、重要な価値があると認められるものを都市景観形成建築物として指定することができる。

2 市長は、前項の規定により都市景観形成建築物を指定しようとするときは、あらかじめ、審議会の意見を聴くとともに、その所有者等の同意を得なければならない。

箕面市都市景観条例 第18条

都市景観形成建築物の所有者等は、当該都市景観形成建築物の適正な管理を行うものとする。

箕面市都市景観条例 第19条

1 都市景観形成建築物の所有者等は、都市景観形成建築物の現状を変更しようとするときは、あらかじめその内容を市長に届け出なければならない。

箕面市都市景観条例施行規則 第15条

条例第17条第1項の規定で定める建築物等は、次の各号のいずれかに該当する建築物等(当該建築物等の敷地内に敷地内に建築物等及び木竹等を含む)とする。